



さいかくどくぎんひやくいん じちゆう えまき
西鶴独吟百韻自註絵巻 西鶴自筆

元禄5年頃成立 一軸
縦34.8cm 横1911.8cm

井原西鶴（寛永十九（一六四二）～元禄六（一六九三））は、『好色一代男』や『日本永代蔵』など浮世草子作家として知られるが、当初は俳諧師として登場し、一日に二万三千五百句を吟じて「二万翁」とも呼ばれ、人気を博した。

その後、自著の挿絵を描き、また浄瑠璃の脚本を手掛け、さらには、さながら芸能リポーターのように歌舞伎役者の評判記事を著すなど、多彩な才能を発揮し、俳諧から一時遠ざかっていたようである。

その西鶴が晩年再び俳諧に取り組むようになった。元禄五年（一六九二）、紀州熊野に

行脚したと言われ、その際、

西鶴自身が吟じた百首に自ら注釈をほどこし、挿絵を加えたものが本書である。従来、

挿絵も西鶴画とされていたが、極彩色であり主に精緻な筆さばきは、狩野派の町絵師が描いた可能性が高い。

俳諧部分は、主流の談林風の中にも当時流行し始めた蕉風を意識し、また注釈部分は、地方の有力者が欲した京や大坂といった都会の風情を、浮世草子風になつぷり表現するなど、西鶴晩年の作風を知る上でも貴重な資料といえる。

掲出の場面は、道頓堀にて、歌舞伎役者が笠で顔を隠しな



「馬を呑む手品師」

がら楽屋から帰る姿を眺めた時の作。後半部分の注釈は、役者紹介・批評まで加えており、サービス過剰とも思えるが甚だ興味深い。

本書はもともと、熊野本宮大社関係の有力者が所蔵していたらしいが、のちに紀州徳川家へ献上された。

（天理図書館 佐上圭太）

天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>
 平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）
 ただし8月6日～20日と31日は休み
 （本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください）